

「10月1日は東京湾の日」川柳コンテスト 入賞句の選評

選評 審査委員長 稲田 眸子(いなだ・ぼうし)

5回目を数えた「10月1日は東京湾の日」川柳コンテストは、今年もまた「東京湾の日」を飾るにふさわしい力作揃いであった。「東京湾の日」大賞、秀作、佳作について選評を添えさせていただいた。選評者は、審査委員長の稲田眸子氏である。

選句にあたっては「ユーモア感覚が表現されているか」「日常の喜怒哀楽が表現されているか」「社会風刺が表現されているか」「東京湾のテーマが表現されているか」「選者の心に響く作品か」をポイントとした。なお、過去4回に亘るコンクールにおいて発表された作品と類似していると判断された作品については、最終選考時に留意した。

記念品贈呈者：「東京湾の日・大賞」川柳1名）、秀作3作 佳作6作 合計10作品

東京湾の日・大賞

〈一般〉

切り身ならわかるが釣れたこれは何？

大恵 やすよ 兵庫県

〈評〉「最近の子どもって、魚が切り身で泳いでいると思ってるらしい…」ギャグのような、そんな話を聞き、思わず苦笑したことがある。切り身で泳いでいるはずないじゃんって笑うが、自分がお昼に食べた切り身の鮭、元の大きさがどれくらいなのか、どんな姿かたちをしていたのか、鮭の顔立ちや鱗に触った感じが想像できなくなっている私たちなのである。

鮭の切り身のロボットを水族館で泳がせる社会実験が相模原市の水族館「アクアリウムさがみはら」で実施されたそう。海や川を泳ぐ魚本来の姿を知らず、「食卓に出される切り身が魚の姿である」と思っている子どもたちの反応を確かめるための愉快的イベントである。

YouTubeに公開された社会実験ムービーには、水槽のなかで泳ぐ鮭の切り身のロボットを見た子どもたちのなんとも言えない、可愛らしいリアクションが収められている。好奇心旺盛な子どもたちは、水槽の中に突如現れた切り身ロボットに見入りながら「なにこれっ？」と首を傾げる子、「変なさかなあ～！ 変なさかなあ～！」と連呼する子。子どもたちはみんな「この魚はおかしい」とわかっている様子。よかった…と安堵の胸をおろしながら何やら不思議な気持ちになっちゃった。

「切り身ならわかるが釣れたこれは何？」は、ユーモア、喜怒哀楽、社会風刺、そして東京湾の情景が見事に詠まれた一句であり、迷わず大賞に推挙した。

東京湾の日・大賞 ＜キッズ＞

お魚が住んでみたいと思う湾

笠井 美沙 長野県

〈評〉「ある日、浜辺で子どもたちが一匹の子亀を突きまわしているのを見た浦島太郎はその亀を助け、海へ逃がしてやりました。数年後、浦島太郎が海で釣りをしていると、大きな亀がやって来て、昔助けてくれたお礼にと海の中の竜宮へと連れて行ってくれました。竜宮では美しい乙姫さまが歓迎してくれ、魚たちの踊りやご馳走をもてなしてくれました」

これはおとぎ話「浦島太郎」の中の一節である。このおとぎ話には続きがある。楽しい毎日過ごしているうちに、浦島太郎は村に残してきたおっか母さんのことが気になり、乙姫さまに相談、その結果、亀の背に乗り村に帰ってきた。そうすると、自分の家はおろか村の様子がすっかり変わっていたのである。

この句を出会った時、おとぎ話「浦島太郎」のことが脳裏をかすめた。東京湾にやってくると、美味しい食事を賞味することができ、様々なリクレーションを満喫できるようになった。しかし、ちょっとでも油断すると、東京湾はみるみる間に廃れてしまう。東京湾はその脆さを抱えているのである。これからも「お魚が住んでくれる湾」づくりに向け、地道な努力を続けていかなければならない。子どもたちのためにも…。

キッズ大賞のこの句はそのことを私たち大人に教えてくれている。ある意味、社会風刺の効いた一句でもある。

＜一般＞

秀作 3句

ビル達が光の棚田になる夜景

岸 保宏 埼玉県

〈評〉東京湾臨海部の工場群の敷地には、作業着姿の労働者が数多く行き交い、帰路にある酒店の一角の立ち飲みスペースは、一仕事を終えた人たちで賑わった。街には全国から働き手が集まってきた。戦前から高度経済成長期、そして現在と日本のものづくりを支えてきた臨海部の工場であるが、産業構造の変化により、製造業の衰退が見られるようになった。かつて栄えた工場群の姿も変わっていったのである。

西の空一面が焼けるようにオレンジや赤で埋め尽くす夕焼けは幻想的な光景。やがて夜の帳が降りてきて臨海部の工場周辺は真っ暗闇となる。そのような中、臨海部再生への取組みが脚光を浴びている。その一つとして川崎市の臨海部は全国にある工場夜景スポットの中でも特に有名。海上から工場夜景を観賞できるクルーズツアーもあり、フォトグラファーはもちろん、観光客や

カップルも集まってきていると聞く。

この句は船上から東京湾の夜景を詠んだもの。臨海部の商業ビルに連なって点る明かりを棚田に見立て、光の競演を諷詠。その中には、工場夜景スポットも含まれているに違いない。それにしても「光の棚田」とは実に見事な捉え方である。

ユーモア、社会風刺、そして東京湾ならではの情景を見事に詠んだ一句である。

ミyakミyakと育む命東京湾

大恵 やすよ 兵庫県

〈評〉大阪・関西万博の公式キャラクターは不思議な生き物「ミyakミyak」。体の青い部分は自由自在に形を変える「清い水」、赤い部分は生命の象徴である「細胞」を表しているようだ。

「脈々と受け継ぐ」という意味の「脈々（みyakみyak）」から来ている「ミyakミyak」は神秘的で独特な響きを持っている。この名前には、今まで「脈々」と受け継がれてきた私たち人間のDNA、知恵と技術、歴史や文化を未来に繋げていくという願いが込められている。

大阪・関西で発信されている願いは、東京湾においても、関係者の地道な努力によって育まれているとこの句は言っている。先人の知恵を「ミyakミyak」と受け継ぎ、東京湾再生に向けた活動を今後も続けてほしいものである。

ユーモア、そして東京湾へのエールを送った一句である。

JKが東京湾を「推し湾」と

吉川 悟司 東京都

〈評〉「JK」という略語は1990年代後半から、若者文化やSNS、メディアで頻繁に使われてきた言葉。「ジェーケー」と読み、高校に通う女子生徒を指す。彼女たちを中心に使われるJK流行語の中に「推し活」がある。「活」は「活動」の略。例えば、好きなアイドルやキャラクター、コンテンツを積極的に応援・消費する活動全般を指す言葉なのである。彼女たちのコミュニティ内で連帯感を高める役割を持ち、同じ対象を応援する仲間との共感を生むとのこと。

この句は、その「JK」が、「東京湾を『推し湾』」してくれたというのである。東京湾を望むベイエリア「お台場」は、子連れのお出かけに最適な観光スポット。子どもたちがアクティブに遊べる屋内型アミューズメントやさまざまな体験ができるミュージアムまで、バリエーション豊かな施設が充実しているが、JKにとっても魅力的なスポットがいっぱいあるのであろう。

社会風刺の効いた一句であり、東京湾の新たなファンを紹介してくれた一句でもある。

佳作 6句

お台場到大砲なき世のありがたさ

安藤 政明 福岡県

〈評〉いまや斬新な建物が立ち並び、近未来的な観光スポットとして定着した「お台場」であ

るが、歴史をひもといてみると江戸時代に遡る。「台場」とは砲台、つまり大砲を置く「台」となる「場所」のこと。江戸末期、ペリー来航をきっかけに、外国船の襲来を脅威に感じるようになった幕府が江戸を守るために築いた砲台が「台場」である。幕府直轄の地や由来のものには「御」を付けて呼ぶ習慣があったことから、「台場」に「御」がつき「お台場」と呼ばれるようになった。現在、「第三台場」と呼ばれる砲台施設の跡が遺構として公園化され、訪れる人々は往時を偲ぶことができる。

いま世界はウクライナ戦争とパレスチナ紛争という解決の容易ではない二つの同時紛争を前にして不安を募らせる一方で厭戦気分が高まっている。歴史的民族対立の温床であるユーラシア勢力圏の境界で勃発したこの二つの紛争の出口は容易には見いだせない。このような中、ロシアの不穏な動きを米ニュースウィーク誌が報じていた。ウクライナではなく日本を攻撃する準備をしていたというのだ。ウクライナ戦争は遠い場所の戦争ではなくて、徐々に日本に近づいている。侵略という不幸な事態に陥らぬことを祈るのみ。これからも「大砲なき世のありがたさ」を味わえる世の中であってほしいと切に願う。社会風刺の効いた一句である。

絵日記に東京湾とえびす顔

松本ひろみ 大阪府

〈評〉夏休みといえば、自由研究やお出掛けなど子どもたちにとって思い出をいっぱい残すことのできる時期。そんな日々を記録するのにぴったりなのが「絵日記」。公園の蝉の声や入道雲、タ立、磯遊び、バードウォッチングなど、絵日記に描くことができる題材はたくさんある。

東京湾には「潮風公園」「お台場海浜公園」「城南島海浜公園」など、1日楽しめるビーチエリアが幾つもある。磯遊びや潮風を感じながらのバーベキュー、自然の豊かさを実感するバードウォッチングなどさまざまなアクティビティを楽しむことができるのである。今日は家族で磯遊びにお出かけ。その思い出を絵日記に記したのであろう。

東京湾をバックに磯遊びに興じている家族の顔は極上のニコニコ顔。まさに、「えびす顔」なのである。日常の喜怒哀楽がユーモアをもって表現されている。

しょっぱいと泣く2歳児を笑う海

鈴木 麻美 東京都

〈評〉2歳は一般的に「イヤイヤ期」や「魔の2歳」と呼ばれ、自我の芽生えや成長によって、自分の思い通りにならないと癇癪を起こすケースが多い時期だとか。子どもの癇癪は、成長の過程で自然に見られる反応のひとつ。今、子どもの心の中では「自分」という意識が芽生え、それを試したくてたまらないエネルギーが渦巻いているらしい。

東京湾には、葛西海浜公園という海水浴場がある。この句はその海浜公園に家族で出かけたのであろう。ベビー用足入れ浮き輪に吾子を入れ、渚で遊んでいる時口に入った海水。思わず「しょっぱい」とべそをかく吾子。抱きあげ、あやし始めるパパ。もちろん、吾子に「海水がなぜし

よっぱいのか？」などの説明はしない。ひたすら吾子のなだめているパパとママ。その健気な姿を見守っている海。すべてを受けとめてくれる懷の深さはまるで母のよう。ユーモア、喜怒哀楽の一句に拍手を送りたい。

我が身体8割方は浦賀産

石川 満 千葉県

〈評〉東京湾には60ほどの河川が流れ込むと共に、浦賀水道や木更津側から流入してくる海流があり、それらが混り合って東京内湾を豊かな漁場にしてくれている。そのような場所に立地する浦賀港には、新鮮なシロギスやメバル、ハゼなどが水揚げされる。地元の食堂では、地魚を使った釜飯や珍しいマグロコロッケなど各店の特色が生かされた絶品定食を賞味することができる。浦賀には海鮮食堂が多数存在し、新鮮な魚グルメを堪能することができるのである。

浦賀産の魚介類を腹いっぱい食べ、育った作者は「我が身体8割方は浦賀産だ！」と吟じ、浦賀を讃えている。故郷愛溢れる作品。ユーモア、喜怒哀楽の滲むこの句に拍手を送りたい。

干満は東京湾の深呼吸

西分 慶雄 東京都

〈評〉潮の干満は、地球の引力に引き寄せられた海面が、月の引力と太陽の引力で引き起こされる海面の水位の変化。大潮は潮の流れが強く、潮の干満差がもっとも大きい状態で、新月または満月の前後数日間起きる。干満差が大きいとより大きく潮が動くので、海中の酸素濃度が上昇し、プランクトンや魚の動きが活発になる。

私たち人間が呼吸をすることで酸素を吸い、体内でエネルギーを作り出しているように、海もまた、潮の満ち引きによって、海の生き物を育んでいる。私たちが深呼吸をしているように、海もまた深呼吸をしていることに気付いた作者の感慨がこの一句のポイント。

東京湾に残された干潟に佇み、潮の干満を見ながら、自然の大きなリズムの中で生かされていること、大自然の懷に抱かれて生かされていることを実感した作者の呟きが「干満は東京湾の深呼吸」。心を揺さぶられる一句である。

永久に不滅を願う生態系

山野 大輔 大阪府

〈評〉「ミスタープロ野球」と呼ばれ、国民に愛された、巨人軍終身名誉監督の長嶋茂雄が逝った。野球人でない私たちでさえ、背番号3に憧れ、その一挙手一投足に熱狂した。プレーだけではなく、独特の感性から繰り出された「長嶋語」は私たちに魅了し続けてくれた。好機に強い「燃える男」の長嶋茂雄は「記憶」にも残るスーパースターだった。その彼が引退セレモニーで発した「我が巨人軍は永久に不滅です」のメッセージは今でも記憶に新しい。この句の「永久に不滅」はその言葉を引用したものであろう。

命は常に流転しながら次の世代に受け継がれていくもの。そこに「永久に不滅」の姿を垣間見

ることができる。日本画の大家・横山大観の画に『生々流転図』がある。水の一生をテーマに、全長40メートルにも及ぶ日本最大級の絵巻物。この作品では、水滴が霧の中から生まれ、やがて小川となり、川へと流れ込んでいく様子が描かれている。その流れは次第に大きくなり、最終的には、海の波が龍へと姿を変え天へと昇っていくという壮大な構成となっている。

絶え間なく変化し、循環する自然の営みこそ、私たちが大切にしなければならないもの。この句、「生態系」のあるべき姿は「生々流転」にある、そう言っているような気がする。この句にも心を強く揺さぶられた。